

## メッセージアウトライン サムエル記第一15:1～35

### 「聞き従うことはいけにえにまさる」

[1-3]「サムエルはサウルに言った。『主は私を遣わして、あなたに油を注ぎ、主の民イスラエルの王とされた。今、主の言われることを聞きなさい。万軍の主はこう言われる。【わたしは、イスラエルがエジプトから上ってくる途中で、アマレクがイスラエルに対して行ったことを覚えている。今、行ってアマレクを討ち、そのすべてのものを聖絶しなさい。容赦してはならない。男も女も、幼子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺しなさい。】』」

アマレク人はイスラエルがエジプトから脱出してきた時、シナイの荒野でイスラエル人を襲った。→出17:8~16、申命記25:17~19 その時、主は「アマレクの記憶を天の下から完全に消し去る」と言われたが、実際にはそれから何百年もアマレク人は存在していた。これは主が心変わりしたというのではなく、アマレク人に悔い改める期間を与えたからと考えられる。しかし、彼らはさらに悪行を重ねるだけであった。それゆえ、ここで主はサウルの率いるイスラエルを用いて徹底的な厳しいさばきを彼らに与えるのであった。主なる神のさばきの石臼はゆっくりとはあるが確実に回る。

[4] この時サウルが招集した兵は歩兵二十万人。これはユダ以外の部族からであろう。ユダの兵は一万人で合計二十一万人であった。

[5]「サウルはアマレクの町へ行って、谷で待ち伏せした」

アマレク人はヤコブ(イスラエル)の兄エサウの孫アマレクの子孫(創世記36:12)でユダ南部のヘブロンからカデシュ・バルネア付近まで広がるネゲブの荒野から南のシナイ半島の間に住んでいた遊牧民族であった。サウルのイスラエル軍はそのアマレク人の住んでいる町まで南下して、その付近の谷で待ち伏せした。

[6]「サウルはケニ人たちに言った。『さあ、アマレク人のもとを離れて下って行きなさい。私があなたがたを彼らと一緒にするといけないから。あなたがたは、イスラエル人がみなエジプトから上って来たとき、親切にしてくれたのです。』ケニ人はアマレク人の中から離れた」

「ケニ人」…シナイの荒野に住んでいた遊牧民。彼らはモーセの義兄弟ホバブの子孫であった。→民数記10:29~33、士師記1:16 彼らは終始イスラエル人に親切であった。

[7-9]「サウルは、ハビラからエジプトの国境にあるシュルに至るまで、アマレク人を討ち、アマレク人の王アガグを生け捕りにし、その民のすべてを剣の刃で聖絶した。サウルとその兵たちは、アガグと、肥えた羊や牛の最も良いものを惜しんで、これら

を聖絶しようとしなかった。ただ、つまらない値打ちのないものだけを聖絶したのである」

「ハビラ」…場所不明、たぶんシナイ半島の東の紅海に面した地域と思われる。

「シュル」…シナイ半島の北西部のエジプトとの国境付近の荒野。かつて出エジプトの民はこの地を通った。→出15:22

サムエルがサウルに伝えた主のことばは、アマレクを人も家畜も聖絶(滅ぼして主にささげる)せよであった。しかし、サウルはアマレク人の王アガグを生かしておき、また、家畜の最も良いものを惜しんで聖絶しなかった。ただ値打ちのないものだけを聖絶したのであった。つまり、サウルは主の命令に従わなかったのである。他の国々ならば敵から奪ったもので自分たちの財産を増やすのは当然であろうが、イスラエルは主の命令によって戦い、主のために聖絶するのである。

[10-11]「主のことばがサムエルに臨んだ。『わたしはサウルを王に任じたことを悔やむ。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ。』それで、サムエルは怒り、夜通し主に向かって叫んだ」

「悔やむ」…擬人的表現。神が心情的に後悔したということではなく、神が扱っておられる人物の性格や行動の変化により、神の扱い方が変わること。サムエルはこのことに心を痛め、怒り、悲しみ、夜通し主に向かって、なぜ、どうしてと叫び続けたのであろう。

[12]「翌朝、サムエルはサウルに会いに行こうとして早く起きた。すると、サムエルに、『サウルはカルメルに来て、もう自分のために記念碑を立てました。そして向きを変えて進んで行き、ギルガルに下りました』という知らせがあった」

「カルメル」…ヘブロン南東約11キロメートルの地にあるユダ山地にある町。「記念碑」…戦勝記念碑のこと。サウルは女も幼子も、乳飲み子も容赦なく聖絶したが自分の身勝手によって価値のあるもの、良いものは惜しんで残しておいた。アガグについても敵国の王をこれ見よがしに凱旋の行列に加えてイスラエルの民に見せたのであろう。また、記念碑を立てたのは自分自身の名誉を高め、幸福感に酔うためであったであろう。サウルは先のペリシテ人との戦いから何の教訓も学んでいなかった。→13:13

今回のことも、主をほめたたえるのではなく、それを自分の功績として民に印象付けようとした不信仰とわがままから出たことであり、それが神への不従順となっているのである。

[13]「サムエルはサウルのところに来た。サウルは彼に言った。『あなたが主に祝福されますように。私は主のことばを守りました』」

しかし、事実は全くそうではない。彼は自分の不従順がどれほど神のみこころに逆らっているのか気がついていない。

[14-15]「サムエルは言った。『では、私の耳に入るこの羊の声、私に聞こえる牛の

声は、いったい何ですか。』サウルは答えた。『アマレク人のところから連れてきました。兵たちは、あなたの神、主にいけにえを献げるために、羊と牛の最も良いものを惜しんだのです。しかし、残りの物は聖絶しました。』

サムエルの詰問に対して、サウルは言い訳をし、「兵たちは…主にいけにえを献げるために…惜しんだのです」と兵たちのせいにする。

[16-19]「サムエルはサウルに言った。『やめなさい。昨夜、主が私に言われたことをあなたに知らせます。』サウルは彼に言った。『お話してください。』サムエルは言った。『あなたは自分の目には小さい者であっても、イスラエルの諸部族のかしらではありませんか。主があなたに油を注ぎ、イスラエルの王とされたのです。主はあなたに使命を与えて言われました。【行って、罪人アマレク人を聖絶せよ。彼らを絶滅させるまで戦え。】なぜ、あなたは主の御声に聞き従わず、分捕り物に飛びかかり、主の目に悪であることを行ったのですか。』

サムエルはサウルの言い訳をさえぎり、主なる神のことばを聞かせた。①あなたはイスラエルの王ではないか。②主の命令はアマレク絶滅であった。③なぜ主のみ声に聞き従わず、主の目に悪を行ったのか。「…飛びかかり」とはサウルの偽りの弁明を強く否定した表現。

[20-21]「サウルはサムエルに答えた。『私は、主の御声に聞き従い、主が私に授けられた使命の道を進みました。私はアマレク人の王アガグを連れて来て、アマレク人たちは聖絶しました。兵たちは、ギルガルであなたの神、主にいけにえを献げるために、聖絶の物の中から最上のもものとして、分捕り物の中から羊と牛を取ったのです。』

サウルは主にいけにえを献げるために、兵たちが最上のもものを取って残しておいたと言い訳をする。一見理屈にかなっているようであるが、主の命令されたこととは違う。

[22-23]「サムエルは言った。『主は、全焼のささげ物やいけにえを、主の御声に聞き従うほどに喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは雄羊の脂肪にまさる。

従わないことは占いの罪、高慢は偶像礼拝の悪。あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた。』

「聞き従うことは、いけにえにまさり」…服従と献身が伴わなければ、形式的ないけにえや礼拝行為は無意味である。「雄羊の脂肪」…全焼のささげ物の一部。その脂肪は主へのなだめの香りとして焼き尽くされた。「従わないことは占いの罪」…占いは神の隠されたみこころを覗き見ようとする行為であって、神の表されたみこころである「主のことば」に従う信仰の生き方とは全く違うものである。「高慢は偶像礼拝の悪」…偶像礼拝は真の神にのみささげるべき礼拝と献身を、神でないものにささげること。サウルの高慢は自分の判断を優先し、主のことばに従わず、いけにえ

を献げるものであり、それは真の神を礼拝する行為ではなく、偶像礼拝であった。  
→出エジプトの民が陥った金の子牛礼拝(出32:1~10)を見よ。

「あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた」これは決定的な宣告である。もはやサウルにとって取り付く島もない。他の国々の王なら自らの力を誇り、自らの考えで進んでもよいであろう。しかし、イスラエルの王はそうであってはならないのである。サウルの王位はまだこの後、何年も続くが、すでにこの時に彼が王位から退けられることは決定しているのである。

[24]「サウルはサムエルに言った。『私は罪を犯しました。兵たちを恐れて、彼らの声に聞き従い、主の命令と、あなたのことばに背いたからです。』」

「私は罪を犯しました」…これが真実な悔い改めであったかは疑問である。

ここでサウルはいかにも信仰深げにすぐにその過失をつぐなおうとする。しかし、これはその場限りの取り繕いのように、真剣さが感じられない。しかも兵たちが彼を強いて、このことをさせたかのように弁解し、自分の面目を保とうとする。

[25]「『どうか今、私の罪を見逃してください。そして、私が主を礼拝することができるように、一緒に帰ってください。』」

サウルはこのように言うことが頻繁に変わる。

[26-29]「サムエルはサウルに言った。『私はあなたと一緒に帰りません。あなたは主のことばを退け、主があなたをイスラエルの王位から退けられたからです。』サムエルが引き返して行こうとしたとき、サウルが彼の上着の裾をつかんだので、上着は裂けた。サムエルは彼に言った。『主は、今日、あなたからイスラエル王国を引き裂いて、これをあなたよりすぐれた隣人に与えられました。実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔やむこともない。この方は人間ではないので、悔やむことがない。』」

サムエルはサウルのことばに耳を貸さず、立ち去ろうとする。しかし、その時、サウルがサムエルの上着の裾をつかんだので彼の上着が裂けた。しかし、この出来事は一つの預言的なしるしとなる。それは、主は、今日、サウルの王国を引き裂いて、彼よりすぐれた隣人に与えられたというものであった。23節で主はサウルを王位から退けられたとすでに言われているが、ここではさらに進んで、王位は彼よりすぐれた人物に与えられたと断言されている。この時点ではまだ何の出来事も起こっていないが、それはすでに主によって決定し、実現することであった。

「…この方は人間ではないので、悔やむことがない」…11節では「わたしはサウルを王に任じたことを悔やむ」と言われているので矛盾するようであるが、11節では擬人法で言われており、この29節では主なる神の御性質は変わらないということが強調されている。ただ、人の心変わりや不信仰に対して、主のとられる態度や処理の仕方が変わるのである。

[30-31]「サウルは言った。『私は罪を犯しました。しかし、どうか今は、私の民の長

老たちとイスラエルとの前で私を立ててください。どうか一緒に帰ってください。私はあなたの神、主を礼拝します。』サムエルはサウルについて帰り、サウルは主を礼拝した」

サウルはサムエルに突き放されたような形ではイスラエルの長老たちや民の前で面目が立たないので、今は、どうか私と一緒に帰ってくださいと必死の嘆願をし、それでサムエルは彼と一緒に帰り、サウルは主を礼拝した。彼には人からどう見られているかと人を恐れる心、人間的弱さがあった。しかし、彼はただ主にのみ従う必要があった。

[32-33]「サムエルは言った。『アマレクの王アガグを、私のところに連れてきなさい。』アガグは、喜び勇んで彼のもとに来た。アガグは『きっと、死の苦しみが去るだろう』と思ったのであった。サムエルは言った。『おまえの剣が、女たちから子を奪ったように、おまえの母も、女たちのうちで子を奪われた者となる。』こうしてサムエルは、ギルガルにおいて主の前で、アガグをずたずたに切った」

アガグは自分は釈放されると思ったのであろう。しかし、彼は自分がかつてイスラエル人にしたようにして殺された。これは同態復讐法というものである。→出21:23~25、レビ24:17~21

「主の前で」…祭壇の前で。

[34-35]「サムエルはラマへ行き、サウルはサウルのギブアにある自分の家へ上って行った。サムエルは死ぬ日まで、再びサウルを見ることはなかった。しかしサムエルはサウルのことと悲しんだ。主も、サウルをイスラエルの王としたことを悔やまれた」

ラマにはサムエルの家があり、サウルはギブアの自分の家に帰った。それぞれベニヤミン部族の領土内にあり、それほど離れてはいないが、もう再び二人が顔を合わすことはなかった。サムエルにとって、頭に油を注いでイスラエルの王としたサウルがこのような結果になり、残念で悲しい思いでいっぱいであったであろう。「主も…悔やまれた」…擬人法。

イスラエルの王として立てられたサウルの不信仰と王にふさわしくない失敗と高慢。それゆえ主も彼を退けられた。しかし、このような出来事を通して、なおも主のイスラエルに対するお取り扱いが進められていく。そしてそれはやがて来られる真の救い主、贖い主イエス・キリストへと続いていくのである。

私たちもサムエルがサウルに語ったことばを心に刻み、不信仰や高慢に陥ることなく、主の前に謙遜で正しい信仰の歩みを進めていかなければならない。

「主は、全焼のささげ物やいけにえを、主のみ声に聞き従うことほどに喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。従わないことは占いの罪、高慢は偶像礼拝の悪。あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた」(22~23)